

I C A 東京大会ベーク報告をどう受けとめるのか

—第2回連続シンポジウムの記録—

手島 繁一 (法政大学講師)

11月28日、東京芸術劇場において上記の標題のシンポジウムが開催された。このシンポは協同総研の基本研究会を兼ねるものでもあった。

参加者は32名で、前回に比べ若干少なかったのは、I C A大会が終わったせいかな？参加者の地域的分布では首都圏が中心であったが、北海道、九州、青森、神戸など遠隔地からの参加もあった。

報告者とそのテーマは以下の通り。

(1)菅野正純(協同総研・専務理事)「ベーク報告をどう受けとめるか」

(2)中田宗一郎(中高龄雇用福祉事業団全国連合会・専務理事)「中高龄事業団のI C A加盟と東京大会」

(3)杉本時哉(労働金庫連合会・顧問)「ベーク報告における資本形成と参加」

「ベーク報告」の読み方・読まれ方

菅野報告は(1)I C Aにおけるベーク報告の背景と位置、(2)ベーク報告が提起したものの、(3)ベーク報告をめぐる論点、という構成で、I C A東京大会直前に独自の立場からの訳業を完成させた菅野氏の面目躍如たる報告であったが、ここでは残念ながらその全体を紹介する余裕がない。あえて強引に要約すれば、(1)ベーク報告が1980年のレイドロウ報告以来の国際的な「価値」論議の集大成であるとともに、95年マンチェスター大会での「憲章」制定、「原則」改定にむけた議論の出発点でもあること、(2)①労働者協同組合など「新しい協同組合」への積極的評価、②協同組合が伝統的に保持してきた社会の変革者としての価値の「画定」とその現代的再生、③資本調達など幾つかの諸点での現代的見直しの提起、④協同組合セクター全体の連携した行動の呼びかけ、などの点は、わが国の協同組合運動の新しい展開にとって重要な意義をもつものであり、また協同総研の研究および

実践活動が目指す方向とも一致するものである。(3)にもかかわらず既存の協同組合の中には、報告の存在さえ知らないなどの極端な事例は論外としても、一部の誤解も含めて、全体としては消極的な受けとめ方が大勢であること、したがって協同総研が普及と議論の活性化に奮闘する必要があることが強調された。

中高龄事業団、I C Aに加盟

ひき続いて登壇した中田氏は、中高龄事業団がI C A加盟を実現し、国際的・国内的にも新しい活動の高みにたったことを報告し、会場の温かい拍手に包まれた。J J Cとの関係では「根拠法が未整備」などの理由で正式参加には至っていないが、加盟申請には同意が与えられ全国的なレベルにおける協同組合間協同の新たな可能性が切り開かれたこと、I C Aの部門別組織であるC I C O P Aの執行委員会メンバーに選出され、スタディツアーの事務局担当として大会成功に多大の貢献をなしたこと、またレジス・C I C O P A会長が日本での労働者協同組合法の実現に強い熱意を示し、労働省への要請行動に同行してくれたことなどI C A大会を中心とした一連の活動とその成果が報告された。中田氏は「本格的な労協運動をめざす事業団の愚直な努力」がI C A加盟を実現した力であることを指摘するとともに、国際的な責任と期待に応えるべくなお一層の奮闘を誓った。

資本形成と参加はどうあるべきか

両報告に基づいての討論を挟んで、杉本氏による報告が行なわれた。報告ではまず、レーガノミクスに象徴されるここ10年来の「新自由主義」的経済政策が人々の生活や精神にいかに深い負の遺産を残してきたのかが厳しく告発されるとともに、その対極にあるものとしての協同の精神と実

践を掘り起こしたベーク報告の意義が解明された。協同組合における資本調達の問題はその理念からして一貫してアポリアとして存在しつづける課題であり、オランダや西ドイツ生協の破産は、これを「株式会社化」という方向で切り抜けようとしたことに原因があった（この点については、角瀬保雄会員から異論が提出された）。モンドラゴンやカナダの生協などの成功した事例が示している「第三の道」は、「組合員主体の方向」を真剣に模索したことにある。ベーク報告で提起された「資本利子制限の原則の放棄」は、協同組合の価値からの逸脱ではなく「自治と安定」という「本質的価値」の擁護として考えられるべきだ。わが国における協同組合金融は資金の集め方、使い方の両面において不十分であり、組合員の資産がむなしく資本主義的金融機関に吸収、悪用されている。協同組合運動は事業であるとともに運動であり、生協の歴史をみても消費者運動、婦人運動、平和運動などの人々の要求（ニーズ）に応える運動を背景にしてきたからこそその発展であった。ベーク報告がいう「新しい協同組合」とは今、人々が求めている健全な「生活の質」を提案する運動と事業であり、またそうでなければならない。

大略以上のような趣旨であったと思うが、見当ちがいの思い込みが紛れ込んでいるかもしれない。すべては筆者の責任においてのまとめである。金融や信用といった分野にはまったくの門外漢である筆者にも分かり易く、かつ労金を通して長年協同組合運動に関わってきた杉本氏の「協同」にたいする熱い思いがヒシヒシと伝わってくる報告であった。

「ベーク報告」の普及と討論を

当日の討論の内容を紹介する紙幅がなくなってしまった。代わりに当日の発言者の名前を列記することで、お許しを願いたい。

山田定市・角瀬保雄・内山哲朗・松村善四郎・高野修・水野武・各会員（発言順）。

さて、すでに御存知のように協同総研は「ベーク報告」についての議論を全国的な規模で大々的

に展開することを重点課題としている。首都圏段階では、この後も月一回のペースで基本研究会を兼ねた連続シンポジウムを開催する予定である（詳細は別途案内参照）。このための有力な「武器」として、先に触れた菅野正純氏の訳業による二冊の本が研究所の初めての出版物として刊行された。(1)協同総合研究所編、富沢賢治・序『変革期の世界における協同組合の価値』（略称：『要約版』）、(2)協同総研資料集No1、協同総合研究所編訳『抄訳／変化する世界における協同組合の価値』（略称：『抄訳版』）がそれである（本の名称が紛らわしいという問題があるにせよ、会員諸氏には所報『協同の発見』の代替として『抄訳版』が送付されていることと思う）。

研究所初めての出版事業を成功させたいという願いも含めて、この二冊の書物の普及に御協力をお願いしたい。あわせて、各会員が所属する職場や大学、地域での学習・討論が活発に展開されることを念願する次第である。

各研究会の今後の日程

協同総研基本研究会

ベーク報告連続シンポジウム

第5回：日本の第一次産業をどう守るか
—協同組合セクターの観点から—

○3月6日（土） 午後1：30～5：00

○目黒区立社会教育館、第3研修室（視聴覚室）

目黒区目黒2-4-36区民センター内 ☎03-3711-1121

○報告①：西浦正晴（和歌山県・紀ノ川農協）

「地域農業の発展と協同組合セクター」

○報告②：菊間満（山形大学・助教授）

「国有林の民主的再生と協同組合セクター」

労働者協同組合の

ごみりサイクル政策研究集会

○3月4日（木） 午後1：00～5：00

○渋谷区立勤労福祉会館、第2洋室

渋谷区神南1-19-8 ☎03-3462-2511

○主催：中高年事業団連合会、協同総合研究所